

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370392

研究課題名(和文)「夢幻」と「秘異」の道教学

研究課題名(英文) Fantasy and Secrecy in the Daoism

研究代表者

砂山 稔 (Sunayama, Minoru)

岩手大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：00091702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果としては、二編の論文と一編の書評を刊行した。論文の中の一編は、李商隠と茅山派道教に関するものであり、今、一編は、『上清变化七十四方経』と『上清経』、『上清衆経諸真聖秘』と『太平御覧』の引用を軸として」と題する論文である。両編の論文では、李商隠の詩の有名な言葉である「碧城」は、『上清变化七十四方経』を典故とすることなどを論じた。書評は、『唐代社会と道教』に関するもので、その中では、特に中国国家図書館(北京)所蔵の敦煌文書BD1219が初唐末のものであることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：In this research activities, I published two papers and one book reviews. In one paper, I considered the relation of Li Shangin (李商隠) and Maoshan (茅山) Daoism. Another paper is called Shang qing bian hua qi shi si fang jing 上清变化七十四方経 and Shang qing jing 上清経-laying stress on the quotation of Shang qing zhong jing zhu zhen sheng mi 上清衆経諸真聖秘 and Tai ping yu lan 太平御覧. Bicheng (碧城), the title of the poem of Li Shangin (李商隠), is the famous word. I proved the word's source is Shang qing bian hua qi shi si fang jing and so forth. Secondly I reviewed the book on the Daoism and Society in the Tang (唐) dynasty. And I specially considered the Dunhuang manuscript BD1219. I proved this manuscript was produced in the end of early Tang dynasty.

研究分野：中国文学・中国思想史・中国思想文化学

キーワード：李商隠 道教 茅山派 碧城 上清派經典 段成式 西陽雜俎 重玄派道教

1. 研究開始当初の背景

道教については、報告者は「長生不死を究極の目標とする漢民族の民族宗教」と定義するのを常としているが、中国十三億の人口の九十パーセント以上を占めると言われる漢民族の死生観の核心を為すのが道教信仰であってみれば、その現代世界に与える影響も多大であると言わなければなるまい。尖閣列島の領有を巡って、中国において激しい反日の感情が噴出し、日中両国の確執が露わになっている現在、改めて中国の人びとが、本当のところ何を考えているのかが、日本の人びとにとっても大きな関心事にならざるを得ない状況に立ち至っており、漢民族固有の宗教である道教がますます注目を浴びるべき状況を迎えていると言えよう。

報告者は、前著『隋唐道教思想史研究』では、隋から初唐に亘る道教重玄派の存在を指摘し、茅山派道教に対置して、盛唐の玄宗時代までの道教の展開を考察した。近年では、こうした論点を踏まえ、重玄派道教をモダンな道教の流れ、茅山派道教をレトロな道教の流れと見る新たな視座を設定し、盛唐の三大詩人である王維・李白・杜甫と道教との関わりを考察する論考を相次いで発表した。そして、そこでは、復古主義を主張する李白は、レトロな道教の流れである茅山派道教と深く関わり、これに対して王維や杜甫はモダンな道教の流れである道教重玄派の代表經典である『本際経』と関わりを持っていることを指摘した。因みに最近における中国の葉貴良氏の『敦煌本《太玄真一本際経》輯校』は、『本際経』の思想の中で、「重玄」を最も重視しているが、これは報告者が前著で夙に指摘したところである。

中・晩唐の道教と文学に関して言えば、中国の孫昌武氏の『道教与唐代文学』では、報告者の前著で展開した茅山派道教と韋応物、李徳裕との関係の考察が支持されている。孫氏のこの著作では、深澤一幸氏の「李商隠と

『真誥』」などにも依拠しつつ、李商隠と道教の関係が一定の紙数を費やして論じられている。孫氏は、李商隠の作品中の神仙に関する内容は、基本的には既に宗教信仰としての意義を有していないとしているが、果たしてそうなのか、検討を要しよう。

次に『酉陽雜俎』に関しては、中国では、夙に魯迅が注目しているが、我が国では南方熊楠が、シンデレラ物語に関わる話が、『酉陽雜俎』の葉限という娘に関する話として記載されていることを指摘するなど、その知的探求心を満たす素材としたことが広く知られている。ただ、『酉陽雜俎』は、甚だ難物であるようで、道教に関する知識が集められている「玉格」・「壺史」に関する今村与志雄氏の注釈を見ても苦心の跡が窺われるようである。

「夢幻」と「秘異」の道教学と題するこの研究は、李商隠・段成式と道教の関係という興味深いアポリアを探究しようとするものである。

2. 研究の目的

「夢幻」と「秘異」の道教学 - 『玉谿生詩』と『酉陽雜俎』を中心に - と題して、晩唐の文人である李商隠(812 - 858)と段成式(? - 863)と道教との関係について研究する。晩唐の時代は、博覧・博学が求められ、李商隠と段成式は、そうした傾向を持つ屈指の人も見られるが、その博覧・博学の要素として、道教に関する知識は不可欠のものであったと考えられる。高橋和巳氏は、李商隠の伝記である『詩人の運命』などにおいて、道教の世界を「夢幻」と表現し、魯迅は、『中国小説史略』の中で、『酉陽雜俎』を秘書と異事を記したものと述べた。「夢幻」の語は、陶淵明の「飲酒其八」に早くも見えるが、李商隠と道教との関係を読み解く手がかりとして魅力的である。また、「秘異」と纏めた語も『酉陽雜俎』の謎めいた世界を表わし得ているのではないかと。

今次の研究期間内に何をどこまで明らかにしようとしたのか。主なものを5点挙げる。

(1) 李商隱の「李賀小伝」には、略述すると、李賀がまさに死のうとする時、昼に一人の緋色の衣を着た人があらわれ、李賀を召そうとした。李賀は母が老いて病んでいるので、死ぬわけにはいかないと、緋色の衣を着た人は、天帝は白玉楼をつくって、おまえに記をつくらせようとされている。天界は楽しい、苦しくはないといった。しばらくして李賀の息が絶え、へやの窓にはもやがあたり、車の行く音や音楽がながれ、間もなく李賀は死んだ、と記している。この記述などは、李商隱の道教に対する感覚を良く示しており、それを「夢幻」と表現して良いと思われる。他方、段成式の『酉陽雜俎』には、「玉格」の項に、道教の老子神化の説に関連して、老子の誕生について次のように語る場所がある。「老君[老子]の母は、玄妙天女という。天が玄黄の気を降した。それは、弾丸のように口に入って妊娠した。瓊胎宮で神を凝らして三千七百年たち、赤明開運、歳[歳星、木星]が甲子にあったとき、扶刀蓋天の西那王国の鬱寥山の丹玄の阿に誕生した」と。これなど正に秘書に載せる異事と言うべきであり、道教經典の探索を要するものである。こうした「夢幻」と「秘異」について考察する。

(2) 李商隱は「無題」の詩に「聞道らく 閨門の萼緑華、昔年 相い望んで天涯に抵る」や「重過聖女祠」の詩に「萼緑華の来る 定所無く」と歌う萼緑華は、茅山派道教の大成者である梁の陶弘景が編述した『真誥』に登場する仙女である。李商隱の詩には、『真誥』の幻想的な仙界が良くマッチするが、萼緑華はその象徴的な存在だろう。段成式の『酉陽雜俎』にも、「六天。一が、紂絶陰天宮という。二が、泰煞諒事宮という。三が、明辰耐犯宮という。四が、恬昭罪氣宮という。五が、宗靈七非宮という。六が敢司連宛宮という。

人が死ぬとみな、そこに到着する。人はつねに六天の宮名をとらえたがっている」という記述があり、六天の宮名は『真誥』闡幽微に典拠を取っているが、これは鬼界についての描写である。両者の『真誥』に対する見方の相違を考察する。

(3) 李商隱の「中元に作る」詩では、「中元に朝拝して上清より回る」と詠じる、道教の最も重要な祭日である三元日(上元 - 正月十五日、中元 - 七月十五日、下元 - 十月十五日)を意識した作品があり、また、「辛未七夕」では、「恐らくは是れ 仙家の別離を好むならん、故さらに迢遞に佳期を作さしむ」と「七夕」を道教に結びつけた詩句もある。一方、段成式の『酉陽雜俎』には、「忠志」の項に、「三月三日、侍臣に細柳の圈を下賜される。これを佩びていると、さそりの毒をよけられる」と上巳の節句にまつわる呪術的な事柄を記す。このような祭日に関わる李商隱と段成式の感覚の相違を考察する。

(4) 李商隱には、「龍池」「馬嵬」など玄宗・楊貴妃の馴れ初めや安史の乱の際に、玄宗が楊貴妃を守れなかった事などを揶揄する作品のあることは良く知られているが、段成式の『酉陽雜俎』には、「忠志」の項に、「(玄宗)帝が、ある夏の日、親王と碁をうたれたときのことである。賀懷智に、琵琶の独奏をさせられた。(楊)貴妃は、局前に立って観戦をしていた。帝が、子[碁石]をかぞえて、まけそうになると、貴妃は、康国[サマルカンド]産の小犬を座席の側で放した。小犬は碁盤にあがり、盤面がめちゃくちゃになったから、帝は、たいへん、喜ばれた」などの話を載せるから、段成式は、玄宗・楊貴妃に好意的であったかも知れない。両者の玄宗・楊貴妃観を比較する。

(5) 李商隱の「重過聖女祠」の詩に、「杜蘭香去って未だ時を移さず」と歌われる「杜蘭香」は中国のかぐや姫と言われ、その事跡は唐末五代の道士である杜光庭の『墉城集仙

録』に見える。また、段成式の『酉陽雜俎』には、韓愈の名作「左遷至藍關示姪孫湘」の詩に関して、韓愈の姪孫である韓湘が、望みの色に牡丹の花を開かせる術を心得ており、韓愈の為に咲かせた花卉には、この詩の「雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前」の句が、紫の字でくっきりと浮かび出ていたと言う話を載せるが、この話と同様のものが、杜光庭の『仙伝拾遺』にある。李商隱・段成式と杜光庭の著述との関わりも考察する。

3. 研究の方法

李商隱の『玉谿生詩』を始めとする詩文と、段成式の『酉陽雜俎』を始めとする著述を道教に関する事柄を念頭において精読する。その際に李商隱に関しては高橋和巳氏の研究、『酉陽雜俎』に関しては、今村与志雄の研究を主に参考にする。李商隱については、劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』などの注釈を用い、『酉陽雜俎』については、四部叢刊本を使用する。道教に関しては、『道蔵』の外、敦煌本写本、トルファン文書などを参考にする。西安などで陸続として発見されている碑文など、出土資料も利用したい。中国はじめ欧米の道教研究の最近の成果も無論参照する。李商隱も段成式も博覧・博学であるので、『道蔵』・敦煌本と彼らの著作を念入りに彼此対照すると、かなり新しいことが発見できそうである。

(1) 李商隱の「碧城」三首について。

「碧城」其の三の末尾には、周知のように「武皇の内伝 分明に在り、道う莫れ 人間 総て知らずと」と歌われていて、『漢武帝内伝』の書名までが露わに見える道教色の強さが印象的である。

そして、其の一は「碧城 十二曲闌干、犀は塵埃を辟け 玉は寒を辟く」で始まる。この「碧城」の語については、高橋和巳氏の『李商隱』では、「仙人の住む碧い霞の館。「元始(天尊)は紫雲の闕に居り、碧霞を城と為す」と宋初の類書『太平御覽』に見える。この題

は詩句の冒頭の言葉を執ったもので、無題詩に類する恋の歌である」と説明する。「碧城」は、いかにも道教の「夢幻」の世界を説くのに適した言葉である。そして、川合康三氏は、『李商隱詩選』の中で、先の『太平御覽』巻六七四に引用するのは、『上清経』であることを指摘する。『太平御覽』の関連箇所を見ると、高橋氏の引用するのは、『上清経』が数箇条連続して引用される内の一条であることが知られる。因みに言えば、「上清」は、李商隱が好んで用いる道教語の一つである。そして、道教の重要経典である『上清経』については、夙に福井康順氏に「上清経について」という論文があるが、不明な点も少なくない。つまり、李商隱の詩と『太平御覽』の引用を手がかりに晩唐・宋初の『上清経』がどのようなものであったかを探究するのは、道教研究としては、なかなか重要で面白い作業だと言えるであろう。

(2) 李商隱と茅山派道教との関わりについて

李商隱と茅山派道教の聖典である『真誥』との関わりについては既に触れた。李商隱の少しく先輩に当たる白居易に「七篇の真誥仙の事を論ず」(「味道」)とあるのは周知の事に属する。中晩唐にあって、『真誥』はインテリゲンチヤに広く読まれた道教経典であったのであろう。その上に李商隱には、既に見たように『上清経』などを読んでいた形跡も窺われる。それでは、李商隱は晩唐時代の現実の茅山派道教といかなる関わりを持っていたのか。深澤一幸氏は、「李商隱を茅山に導きし者」の中で、李商隱の従叔李褒を取り上げ、「この甥(李商隱)と従叔はおそらく文章能力において、また茅山道教への真摯な信仰において、たがいに尊敬しあい、評価しあっていたといつてよからう」とされる。一方、『道教与唐代文学』の著者、孫昌武氏は、上述した通り、李商隱が道教を信仰したとは考えられていないようである。李商隱と

晩唐時代の現実の茅山派道教との関わりも考察する。

(3) 段成式と道士の逸話

今村与志雄氏は、『酉陽雜俎』について、『酉陽雜俎』の原文には、「道」「道教」「方士」「道士」「術士」などという語が全書を通じて散見する」と述べる。「道教」の語に関しては留保して置きたいが、「道士」については、その逸話を纏めた「壺史」以外にも散見することは事実である。例えば、『酉陽雜俎』の続集に「朱道士は、太和八年、常に廬山に遊び、潤石に憩う、忽ち蟠蛇の堆き繪錦の如きもの、俄に變じて巨龜と為るを見る、これを山叟に訪ぬるに、云う、是れ玄武なり」と載せるのなどがそれである。道士の逸話は、杜光庭によって編纂された数々の伝記、即ち、『仙伝拾遺』『神仙感遇伝』『録異記』『墉城集仙録』等に載せられるが、また、宋初の小説集である『太平広記』にも収録されている。これらを彼此対照することによって、『酉陽雜俎』に表われる道教の位相を考察する。

(4) 李商隱と段成式の全体像

高橋和巳氏は李商隱の思想について、次のように述べている。「ちなみに李商隱は、幼時、故郷懷州河内（河南省北辺）の近く、玉谿と呼ばれる山峡にあった道觀で勉強したことがある。（中略）諸思想の混在した時代風潮の中であって、李商隱は幼時に道家思想の洗礼を受け、やがて成人して官吏となるや、官吏のイデオロギーたる儒家思想を身につけ、晩年には仏教（禅宗）へ傾くといった、思想的遍歴をたどっている。（中略）このようにひとつの觀念体系から他の觀念体系へ移行する時、先行觀念を捨象せず、それらを奇怪なまでに平等視し並列化する態度こそ、逆に他ならぬ李商隱の「思想」であったともいえよう」と。

宋の蘇軾は、幼時、天慶觀の道士から教えを受けたことが、後年、彼が道教を愛好した

ことと関わるとするのが、蘇軾の思想を語る際の通説化している見解である。こうした事を李商隱に投影すると、高橋氏の見解は、いささか道教・儒教・仏教のバランスが良すぎる嫌がないでもない。もう少し道教に傾斜した視角から李商隱の全体像に迫ってみたい。

魯迅は『中国小説史略』の中で、段成式と『酉陽雜俎』について次のように述べている。「（段）成式の家には奇篇秘籍が多く、また博学強記で、殊に仏書に造詣が深かった」「『酉陽雜俎』二十卷、すべて三十篇は今みな残っているし、また續集十巻もある」「その根源はあるいは張華の『博物志』から出たものであろうが、しかし唐の時には、独創の作のように考えられていたものだ」と。また、今村与志雄氏は、『酉陽雜俎』と段成式について、かの南方熊楠は、『酉陽雜俎』を「大著述大珍典」とたたえ、つねに推賞してやまなかったが、この著述をプリニウスの『博物志』に比していたと述べ、その上で、人間としての段成式は、大プリニウスに似ているというよりも、『クオ・ヴァディス』に出てくるペトロニウスに相通ずるといった方がよいのではないかと、かねがね思っている、と語っている。しかし、『酉陽雜俎』は、過激な魯迅から支持されたようにもっと尖鋭な魂の持ち主によって書かれたのではなからうか。

4. 研究成果

25年度と26年度には、主として李商隱と道教に関して研究を行い、論文「「聖女」・「中元」と「錦瑟」・「碧城」 李商隱と茅山派道教」と論文「『上清变化七十四方經』と『上清經』 『上清衆經諸真聖秘』と『太平御覽』の引用を軸として - 」を執筆した。論文は、李商隱の名作「碧城」の題名の典故とされる、『太平御覽』に『上清經』として引用される道教經典が、現行道藏には未収でありながらも、由緒正しい上清經典の一つ

である『上清变化七十四方経』であろうと推定されることを指摘した。

論文は、この『太平御覧』の『上清経』が重要經典の『上清变化七十四方経』であるとの推定を種々の資料を用いて証明を試みたものである。そして、その過程で、副産物として、『上清变化七十四方経』と今一つの重要經典である『龜山玄録』との密接な関係にも言及することになった。また、『上清变化七十四方経』や『龜山玄録』に登場する神格、道君は、茅山派道教の聖典である『大洞真経』とも深く関わり合っているようである。これらの研究は、李商隱の道教に対する関心の深さ、知識の豊富さを改めて解明したものであり、また、『太平御覧』の研究を通じて宋初の道教の研究、更には、まだまだ未解明なところの多い上清派道教經典研究にも一定の貢献をしたものと思料する。

27年度は、引き続き『大洞真経』や『龜山玄録』などの上清派經典の研究を行う傍ら、『酉陽雜俎』に見える「鬱金」・「鬱金香」と李商隱の詩に現れる「鬱金堂」・「鬱金裙」についての考察を行ったが、論文完成には至らなかった。そこで、更に、段成式の『酉陽雜俎』の「玉格」「壺史」などの集中的に道教関係の記事が記されている部分の研究に歩を進めた。このうち「壺史」には、羅公遠などの道士の事跡が記されているが、折しもこの羅公遠や謝自然などの道士の研究を含む遊佐昇氏の『唐代社会と道教』（東方書店、2015）が公刊されたので、読み進める中に、書評を書くこととなり、「道教の信仰・靈験と俗講・変文 遊佐昇『唐代社会と道教』の行間を読む一」を発表した。

遊佐氏は該著で、一見して道教重玄派の思想に近いと見られる俗講の台本である敦煌文書 BD1219 を、唐末以後の文献であるかのように看做しており、報告者の道教重玄派に関する学説に批判的である。報告者は書評において、BD1219 文書は、『国家図書館蔵敦煌

遺書』の「條記目録」では、「七～八紀。唐写本」とされていること、BD1219 文書に「雍州」という地名が見えるが、雍州は、玄宗の開元元年（713）には、京兆府に改められていること、更に BD1219 文書には、初唐の道教重玄派の成玄英の『老子道德経開題』（敦煌ペリオ文書 2353）に引用される『昇玄経』の特殊な引用経文と同様の経文が引用されていることなどにより、BD1219 文書は初唐末の、道教重玄派に連なる道教勢力の手になる俗講の台本ではないかと指摘しておいた。この指摘は、今後、唐代の道教と文学との関わりを考える場合でも重要なものであろう。

報告者は、別途、『赤壁と碧城 唐宋の文人と道教』なる著作を纏めた。その第一部「唐代の文人と道教」は、前述した王維・李白・杜甫と道教との関わりを考察した論考の外、韓愈・柳宗元と道教との関係を考察した論考をも収録し、第二部「宋の文人と道教」に含まれる蘇軾等に関する論考と合せて、唐宋八大家と道教の研究も完結させているが、合わせて、第一部に李商隱に関する論文等も収録し、今秋刊行する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

砂山 稔、道教の信仰・靈験と俗講・変文 遊佐昇『唐代社会と道教』の行間を読む（書評）東方、417号、査読無、2015、33-39

砂山 稔、『上清变化七十四経』と『上清経』 『上清衆経諸真聖秘』と『太平御覧』の引用を軸として、アルテス リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）95号、査読無、2015、75-92

砂山 稔、「聖女」・「中元」と「錦瑟」・「碧城」 李商隱と茅山派道教、東方宗教、123号、査読有、2014、41-61

URL <http://www.taoistic-research.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂山 稔 (SUNAYAMA MINORU)

岩手大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：00091702